

視覚に障害のある子どもと『絵』に関する研究

－『絵』や『描くこと』に親しませる取組を目指して－

県立盲学校 教諭 正井 隆 晶

Masai Takaaki

要 旨

視覚に障害のある子どもにとって『絵』を描くことは、その障害のために難しいものである。また、子ども自身も、そのように感じていることが多い。『絵』に親しませたり、『描く』ことに親しませたりするためにはどのようにすればよいのか、鑑賞でなく、実際に描かせる取組を通して考察した。

キーワード： 視覚に障害のある児童生徒、指導方法の工夫、絵

1 はじめに

近年、「手で見る美術館」といった、視覚に障害のある者を対象とした美術鑑賞ツアーや展覧会がごく一般的になってきた。それにともなって、県立盲学校に勤務する私は、視覚に障害のある子どもの図工や美術の指導について訊ねられることが多くなってきた。そして、それは今までの私の取組を見直す機会ともなり、また、多くの刺激を受ける貴重な機会ともなっている。

今回の研究では、そのような背景の中、視覚障害者と『絵』をテーマとした。視覚障害者の画家の存在も知らないわけではなかったが、学校教育では実践例が少なく、取組の指針も得られにくく、これまでは、あえて研究の対象としては取り上げてこなかった内容である。

2 研究目的

視覚障害には障害別に大きく分けて、視覚が全く使えない『全盲』と、見えにくさはあるものの視覚が使える『弱視』の2種類がある。

全盲の子どもの場合は、どの教科においても触覚や聴覚に重点をおいた指導となり、弱視の子どもの場合は、それらも必要に応じて併用しつつ、視覚を最大限活用させる指導を行うこととなる。美術や図工においても、それは同様であり、個々の実態に合わせ、子どもが楽しめ、自分自身の力で創作できる題材を中心に取組を進めてきた。

しかし、近年の取組を振り返ると、個々の障害の実態に合わせるあまり、弱視の子どもにおいても、内容が立体的工芸的なものに偏っていたことは否めず、意図的ではないにせよ結果的には『絵』の内容は敬遠する傾向になっていた。『絵』の内容を全く経験させず、『絵』という美術の魅力的な一面を鑑賞などを通じて訴えても、それは『絵』を十分に味わったということにはならないであろう。このような反省のもと、視覚に障害のある子どもに『絵』や『描く』といったことに親しませ、つくる喜びを感じさせる取組について研究する。

3 研究方法

- (1) 題材の開発とその工夫
- (2) 研究授業による考察や検証
- (3) 評価規準の設定と評価方法の工夫と改善

4 研究内容

- (1) 生徒の実態と題材設定

ア 対象生徒の実態

対象生徒の実態を表1に示す。左目の視力、15cm手動弁とは15cm離れた所で手が動いているのが分かる程度の視力のことであり、また、最大視認力とは、視距離に関係なく最も小さな物体を識別する能力のことをいう。

対象生徒は、普段から文字を見たり書いたりする際には、右目のみを使用し、また、よく見えるように、顔（眼）を対象物に（1.5cmぐらいまで）近づけてものを見ている。そのため手元が常に暗くなりがちで、教室の机の上にも照明が設置され、明るさが保たれるように配慮して学習を行っている。

視野も晴眼者よりかなり狭いため、よく見ようとして顔を近づけると、ものの全体像が視野からはみ出し、把握しにくい視覚状態でもある。

イ 題材設定の理由とその工夫

対象生徒は上記のような視覚状態にあるため、これまでもほとんど『絵』を『描く』という経験はしておらず、また、障害の状態から考えて、離れた風景や対象物を画面に描くことは難しいと考えられた。そこで、描き方の練習をした上で、描く方法のヒントがいくつかあり、また、『絵』をじっくり鑑賞する機会にもなる『模写』を題材に設定することとした。ただし、描いた経験がほとんど無いことを考慮して、今回は彩色しないで、鉛筆のみでの『鉛筆模写』とし、また、模写対象の『絵』としては、あまりに細かく複雑なものでなく、なおかつ無彩色で描かれているパブロ・ピカソの『ゲルニカ』の部分を選んだ。

- (2) 学習指導計画の立案

ア 題材名

『鉛筆模写に挑戦しよう』

イ 指導目標の設定

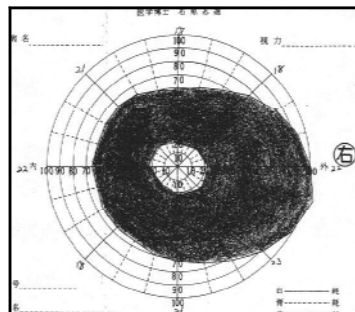
- ① 今まで親しむ機会の少なかったであろう『絵』に親しむことを通して、『絵』を描いたり見たりすることに親しみ楽しむ。
- ② 形や絵の描き方の基礎的な方法を習得するとともに、自分なりの観察や発見を促す。

ウ 学習計画における指導上の留意点

- ① 障害のため、視距離をとることは難しく、模写対象の絵や画用紙に著しく顔を近づけて見て描

表1 対象生徒の実態

性別：男子 年齢：13歳	
教科学習の状態：学年相応の内容を学習している。	
障害の状態	
①障害名	未熟児網膜症
②視力	右 0.05 左 15cm手動弁
③最大視認力	0.8（視距離 1.5cm）
④色覚異常	なし
⑤視野（右眼）	右図参照：中心の白い部分が見えている部分を示す。



くことが予想される。そのため手元が暗くならないよう、また、姿勢が悪くならないよう、照明や机の高さなど、学習環境に配慮する。

- ② 鉛筆は、B～3Bまでのものを使用させる。
- ③ 描き方の指導の際には、鉛筆の動かし方などが分かりやすいよう、指導者が模範を示し、目を近づけさせて観察させるようにする。
- ④ 制作途中も、描き方や見方のヒントを必要に応じて具体的に指導する。
- ⑤ これまでの取組と同様、美術ノートを作成し、ファイルにしながら取り組みを進める。

エ 指導計画

授業計画を表2に示す。全12時間で授業計画を立てた。

(3) 評価計画と評価表

ア 観点別評価と評価規準・方法

中学校美術科の評価の観点には『美術への関心・意欲・態度』『発想や構想の能力』『創造的な技能』『鑑賞の能力』の四つである。今回の題材については『美術への関心・意欲・態度』『創造的な技能』『鑑賞の能力』の三つの観点から評価を行った。評価規準、評価方法について表3に示す。評価はA・B・Cで行う。Aは「十分満足できる」と判断される状況、Bは、「おおむね満足できる」と判断される状況、Cは「努力を要する」と判断される状況である。表中の評価の規準はBである。

なお、視覚障害というハンディキャップはあるものの観点別での重み付けはしないこととした。

イ 評価計画表

評価の視点を授業計画に沿って一覧にした評価計画表を表4に示す。【関】は「美術への関心・意欲・態度」【創】は「創造的な技能」【鑑】

表2 指導計画

第1次	模写の方法を学ぼう【格子変換について】	1時間
第2次	練習してみよう(1)	2時間
第3次	練習してみよう(2)【鉛筆でのグラデーション】	2時間
第4次	模写する絵画について学び、模写の準備をしよう	1時間
第5次	模写制作(1)輪郭を描く (2)輪郭や線の表情を描く (3)線の表情や表現を描く (4)全体を観察し修正する	5時間
第6次	鑑賞と飾り付け	1時間

表3 題材における評価規準と評価方法

観 点	評価規準	評価対象
美術への関心・意欲・態度	①『絵』を描くことに興味を持って取り組んでいる。	授業態度 美術ノート
創造的な技能	①描き方の基礎的な方法が理解できる。 ②格子変換による描き方ができる。	作 品 制作活動
鑑賞の能力	①模写した『絵』の自己評価を通して作品に良さや美しさを感じることができる。 ②模写対象の『絵』の作者や時代背景、歴史などにも関心をもつことができる。	発言 自己評価 美術ノートの記述 発言・感想

表4 評価計画表

	生徒の活動	評価の視点	【関】 【創】 【鑑】		
第1次 [1時間]	模写の方法を学ぼう 【格子変換について】	【関】模写への興味や関心を持つ。 【創】格子変換を理解する。			
第2次 [2時間]	練習してみよう(1) (格子変換を使用した描画)	【創】格子変換による描き方ができる。			
第3次 [2時間]	練習してみよう(2) (鉛筆でのグラデーション)	【関】グラデーションに興味・関心を持つ。 【創】グラデーションの方法を理解する。			
第4次 [1時間]	模写する絵画について学び、 模写の準備をしよう	【鑑】模写する絵画の作者や時代背景を理解する。 【創】格子を作成する。			
第5次 [5時間]	模写制作 (1)輪郭を描く (2)輪郭や線の表情を描く (3)線の表情や表現を描く (4)全体を観察し修正する	【創】格子変換による描き方ができる。 【創】線の細い・太いの違いや、濃淡をつけた描き方ができる。			
第6次 [1時間]	鑑賞と飾り付け	【鑑】美術ノートに制作活動の感想や自分の作品の評価を書く。			
			授業態度・制作活動全般・美術ノート		
			作 品		
			点数の平均		
観点別	美術への関心・意欲・態度				
総合	創造的な技能				
評価	鑑賞の能力				

は「鑑賞の能力」を示す。なお、「美術への関心・意欲・態度」については、毎時間の授業の様子、制作活動全般を通じて評価することとした。

(4) 美術ノートについて

美術ノートの例を図1および図2に示す。美術ノートは、授業の学習内容や予定が事前に分かり、見通しをもてるようにと作成している。また、制作後に制作風景や作品の写真などを張り付け、取り組んだことが一つの記録として残るようにもしている。制作風景などは、保護者にも子どもの様子や学習内容を知らせ理解が得られるという効果もあり、今後も続けていきたいと考えている。

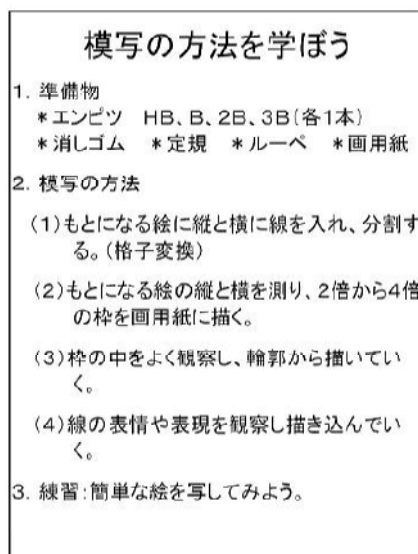


図1 美術ノート例1



図2 美術ノート例2

5 研究結果と考察

(1) 研究授業

研究授業は、第5次の第1時間目、『模写制作(1)輪郭を描く』のところで実施した。『ゲルニカ』を描き始める最初の時間であったので緊張した様子だったが、集中して取り組むことができた(写真1)。『描き方』の具体的な指導については、アドバイスのタイミングが予想していた以上に難しく、教員側が言葉かけをしすぎてしまったことは、大きな反省点である。1対1の授業ながら、本人自らの発見を促す指導、指導する側の待つ姿勢、適切な言葉かけのタイミング等について、改めて、その重要性を考えさせられた。



写真1 制作風景

また、『描き方』の一つの方法として、図3に示したように、より多くの点を描いてから、その点と点を結ぶ方法は、特に視野に障害のある生徒の場合に有効と考えられ、効果的なアドバイスとなった。実際、その後の授業では、この方法にしたがって曲線などを描くことがスムーズに行えた。

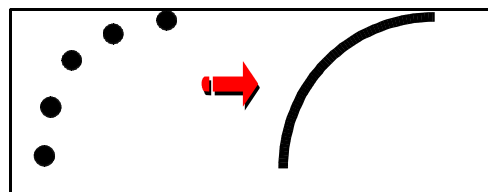


図3 点と点を結ぶ描き方の例

(2) 授業計画について

全12時間で授業を計画したが、予定を大幅に越え最終16時間の長い取組となった。グラデーションの練習は2時間であったが3時間に、第5次も5時間であったが8時間を費やすこととなった。しかし、生徒自身が最後まで集中力を失わず取り組み、『描く』ことに予想以上に興味・関心を示したことは、大きな成果であった。ただ、予想以上に『描く』ことに時間がかかることも今回の取組を通して分かったので、あまり長時間の取組にならないよう、原画の大きさなども含め工夫して

いく必要がある。

(3) 作品と美術ノートからの生徒の感想

完成作品を写真2に示す。作品の大きさは縦21cm、横24.5cmであり、原画の大きさは、縦15cm、横17.5cmである。格子の大きさを比較すると原画の格子は5cm角、作品の大きさは7cm角である。美術ノートの感想には、「楽しかった。鉛筆の表現の幅広さに驚いた。鉛筆にもこんな世界があるんだとびっくりした。」と書かれてあり、また、形を写すのが難しく、鉛筆で濃淡を付けていく時が面白かったという感想も聞かれた。いずれにせよ、予想以上に『模写』を楽しんでくれたことから取り組んでよかったと感じた。

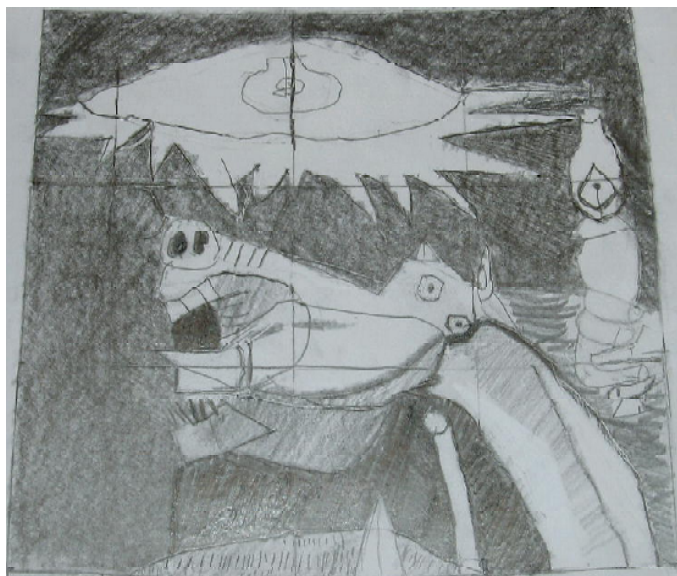


写真2 生徒作品

(4) 評価計画と評価結果

評価計画表に沿って行った評価結果を表5に示す。それぞれの評価場面での評価は1～5の数値で評価し、合計を評価回数で割った平均点からABC評価を行う方法をとった。0～1.9までをC評価、2.0～3.9までをB評価、4.0～5.0までをA評価とした。この取組の場合【関】は3か所で評価し、その平均が4.0のA評価、【創】は7か所で評価し、その平均が3.3のB評価、【鑑】は2か所で評価し、その平均が3.5のB評価である。通知票につける5段階評価については、A、B、Cの三つ

表5 評価結果

	生徒の活動	評価の視点	【関】	【創】	【鑑】
第1次 [1時間]	模写の方法を学ぶ (格子変換について)	【関】模写への興味や関心を持つ。 【創】格子変換を理解する。	4	3	
第2次 [2時間]	練習してみよう(1) (格子変換を使用した描画)	【創】格子変換による描き方ができる。		3	
第3次 [2時間]	練習してみよう(2) (鉛筆でのグラデーション)	【関】グラデーションに興味・関心を持つ。 【創】グラデーションの方法を理解する。	4	4	
第4次 [1時間]	模写する絵画について学び、 模写の準備をしよう	【鑑】模写する絵画の作者や時代背景を理解する。 【創】格子を作成する。		3	4
第5次 [5時間]	模写制作 (1)輪郭を描く (2)輪郭や線の表情を描く (3)線の表情や表現を描く (4)全体を観察し修正する	【創】格子変換による描き方ができる。 【創】線の細い・太いの違いや、濃淡をつけた描き方ができる。		3	
第6次 [1時間]	鑑賞と振り返り	【鑑】美術ノートに制作活動の感想や自分の作品の評価を書く。			3
授業態度・制作活動全般・美術ノート			4		
作品				4	
点数の平均			4.0	3.3	3.5
観点別	美術への関心・意欲・態度		A		
総合	創造的な技能			B	
評価	鑑賞の能力				B

の組み合わせをもとに評価することとなり、1学期間に複数の題材に取り組んだ場合は、各題材ごとのABC評価から学期のABC評価を出し、最終の評定を決定していく。

なお、今回、観点別に重み付けをしなかった。しかし、一般校に通う視覚に障害のある子どもの場合などは、障害のない子どもとの比較の中で、観点別に、または全体に対して重み付けをするなど、配慮も必要であろう。観点別で考えると、『創造的な技能』に関しては重み付けを考へても良いと思われる。技能面は視覚に障害のない子どもと比べると明らかに不利と考えられるからである。ただ、視覚障害というハンディのため、「上手く描けなくても仕方がない」から点数的に重み付け

するというのではなく、授業の前半、中盤、後半での様子を比較し、技能の上達具合から重み付けを考えるようにしたい。例えば、授業の前半では努力を要する状態であったのが、授業の後半では、「おおむね満足できる」状況になったとする。その場合、一概には言えないが、視覚に障害のない子ども以上に努力していることも十分考えられ、視覚に障害のない子どもが、「おおむね満足できる」状況から「十分満足できる」状況に上達したのと匹敵する場合もあろう。また、全体的に重み付けする方法としては、『創造的な技能』の重みを他の観点より低く設定するという方法もある。例えば、『美術への関心・意欲・態度』：『発想や構想の能力』：『創造的な技能』：『鑑賞の能力』を2：2：1：2というように設定する。すると『創造的な技能』の全体に占める割合が減り、差を少なくすることができる。この方法の場合は、視覚に障害のない子どもも含め全体を対象にすることができるので、『創造的な技能』におけるハンディを考慮して、視覚に障害のある子どもに加算する方法よりは考えやすいかもしれない。いずれにせよ、評価については、重み付けの程度も含め、今後さらに研究していく必要を感じる。

6 まとめと今後の課題

今回は、『描く』という体験がほとんど無い子どもを対象に、『模写』を通して『絵』をよく鑑賞し、『描く』ことに取り組ませた。しかし、『絵』を写すという方法一つを取り上げてみても、格子変換は、拡大するなど、サイズを変える場合は必要であるが、同じサイズで写すのであれば、ライトボックスを使用する方法や透明な素材を上重ねて写すなど、いくつかの方法が考えられる。伝統的な『絵』を上から写し、現代的な彩色を加えたり、写した線をもとにデフォルメを加え、自分なりの『絵』に仕上げたりするなど、『絵』に親しめる取組のアイデアについてはいくつか気が付いた。今後は、そういったアイデアも試していきたい。ただ、『描く』ことに関しては、視覚に障害のある子どもの場合、より早い時期から取り組む必要を感じる。高学年になってくれば、上手く描きたいといった思いが強くなる一方、思うように上手くは描けないといった思いも強くなり、『描く』ことへの敷居は高くなってくるので、図画工作をはじめとして、理科の観察など、他教科においても『描く』ことを特別なこととせず、むしろ、日常的に経験させていく必要を感じる。視覚に障害のある子どもの場合は、自ら『描く』ことに積極的になるとは考えにくく、指導者側で意識的に『描く』ことにかかわれる環境を整える必要を感じる。

7 おわりに

視覚に障害のある子どもは、『描く』ことにとどまらず、カッターや彫刻刀などの道具類の使用においても制限を受けることが多い。しかし、指導者側の発想の転換やアイデア一つで様々な可能性が開ける。『削る』ことが難しく凹凸をつけられなくても、『張り付ける』ことによって凹凸を作ることができるのはよい例であろう。柔軟な視点で新しい可能性を常に追究していきたい。

参考・引用文献

- | | | |
|--------------------------------|----------|------|
| (1) 中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—美術編— | 文部省 | 平11 |
| (2) 奈良県中学校指導資料 美術 | 奈良県教育委員会 | 2001 |
| (3) 中学校における評価方法の工夫改善 | 奈良県教育委員会 | 2002 |